國鑑

五下

内閣文庫

内閣文庫	
番號	和 28392
冊數	11(7)
函號	185 1

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

浅草文庫

十四年中山乃君趙ヨリ攻られて齊に為ゆく
十五年秦ヨリ楚乃軍を破り襄城を切る
楚太子横死人質ヨリ帰り齊と和睦す
十六年初趙乃武靈王長子章を太子とす
ちゝしの後ヨリ孟姚といふ愛妾乃子何を
寵愛あるゝ國政偏に其所ハ隙居しる
主父と号し迎習士かゝ石具し所沙に
出立ゝ胡乃地を見ゝし所雲中

九原より南乃方秦の都咸陽と繋んと
思し秦地利及秦王乃人柄見んとて
使者と偽り秦へ入もの秦王し初めてこれと
つらさるもの脱よして其客儀ゑい人にて
又こたりし強情にて迫りけりとそれと出
ものゆ関而と出ものゆしの秦人膳をして寒し
き所秦使代ものゆ城八ケ所を攻るより切て
秦王使王に書を賜り武関ゆく対面して

まれあるより兄弟乃契を結ばんとひより
られ懐王鬼角会議ものるの昭雎屈平
なんとも止めけるとも小子子蘭の進めよ
りものゆ秦へ入しの秦王武関へ伏勢して
見とも捕咸陽城へ連行けるはしも
太子横人質と成りて齊へ行られ大臣の
人と外れ王子とゑんせいひしと昭雎一人
ゆの所屈より使て齊へ其すし告て太子を

逆へ奔國秦絶望と頃襄王といふ
十七年初秦乃昭襄王齊の孟嘗君の賢
なるを聞及ひく使湯君といふ連枝を
齊へ人質へ遣孟嘗君と逆へく亟相と
志為る武人孟嘗君を齊へ忠あらんと
志為るを秦乃侍為ん元れしと
いふ者あり小賓とを奔望秦石籠て
既へ殺ふんとをりける孟嘗君秦王に
寵姫へ奔のよりうれへ奔りしを寵姫狐
白裘賜ふ小中に孟嘗君只一乃狐白裘
何を求れと先へ奔秦王に献りて今を
奔の中へ入を力れ土へ物盗とて小盗をする
事秦得を奔るものあり奔王乃義を
志乃元へ入り狐白裘と盗て出を分寵姫へ
遣りれへをりきへ中なりあく欲し為れ
奔る秦王又後悔して奔追を捕りける

孟嘗君秦を出て夜半に関に至りて関所を開く為に鶏鳴すれば関乃掟に鶏鳴なれば人を出さぬ迄なれども近付んいうせんせを以て有る又侍よりく雞乃鳴真似する者ありまれば関乃雞皆一同に鳴くなり関乃戸あき高免まして帰りまる

多くひいらの賤き業なりとも一芸あるん者ハ附るとうて事の間と合ても

多くの海のあるうちにぬきぬきすハ世ハ
俗物乃面をうたいひなぎるハ
心潔ハ事ハ
物盗乃事ハ
かゝる成よりハ書殘しまん

かくて孟嘗君源くく秦王と怨て韓魏と
牒し合せ秦に伐く函谷関あてたよ勝軍
ありしハ秦王河東乃城二ヶと割て和を

入国案内の家此時諸侯の国は平原君とて
公子あり又侍とぬきて食客常に数千人
所見て公孫龍孔穿などいふ人多集りて
十八年楚の懐王秦に逃げ諸侯に訴へしら
ざるを入れたりしかば又秦へゆき明る十九年
秦にて薨じ国に其喪を楚へ送りて
きれ、楚人皆親戚の手に葬りける諸侯
是よりして秦と直なりて思ひきる

かく敬愚なる懐王とうたし楚人のかく
うるひしたるは実に有るべき事なり
いかなる紀綱にて見しかば此人
思ひたるやうの事は諸侯君の
誤多きにそんしある
二十年趙の主父燕齊の軍と合て秦へ
中山と打滅し第ての不意に達せしかば
其よりおもむきて国中へ大赦を行ひ又国中の

人ゝ酒乃ミ遊ミ楽せ乎醸せしかゝるを百ゝ
間ゆゝ有ゝ時王乃母盈姚死しゝゝ
きれハ王ハ寵愛し衰へゝゝしゝ折しゝ王
鍾愛を胡しゝ有る時主父初新ゝ有ゝ
太子公子章ゝ面屋ゝきゝゝ主父ゝ屬る
ゝ紙ゝ有ゝ心よりゝゝ世ハ王ハ國を
二ゝ分ゝ公子章を代乃地ゝ王とせゝゝ
思ひけるゝいまゝ治定を外ゝけゝ公子章ハ

ゝ法田ゝ禮を傳ゝて竊ゝ國を奪んゝの
企ゝゝ主父ハかゝゝを考ゝて王と伴ひ
沙宮ゝしゝ有る遊境ある公子章折ハ
ゝゝと亂と起しゝ主父乃法石ゝゝ傳ゝて
王とゝゝゝ肥義ゝ仕かゝゝおのひゝゝ
新ゝ有ゝ常ゝ仕ゝ好ゝこれを教しけゝ
李兌公子厳周ゝゝゝ勢を催しゝて掛ゝ
けゝハ公子章教ゝになゝゝゝ主父の旅館へ

逃籠りしを續くに及て園公章英に
因て禮を教しめ給て平ぎ行ひ
李光等思ひき敗ぬ公子章反ひ
主父乃ち屋形を圍みて
めて引とらんよりは我輩よりも安穏ぬや
あるべく主父を出し給て猶も
厳しく夜昼食物とあたへし
後崔乃數張婚出しめ食まる二月

餓死をまつ
ちまちに英邁と聞えし武靈王を
かゝる淺ましき紀所乃果て給ふ
實に齊の災ハ此を始しきの
みなるべし
此年秦魏冉を以て丞相とし
二十二年韓魏秦と戦ひ魏冉左更白起を
以て名將に進めて大梁を攻て是を防ぎ

伊闕の戰に首二十四萬討取る城
五ヶ所攻落せり白起を國尉
といふ官をもて為す事始め
二十三年秦王楚王へ書を送りて一戰申さん
と用意あるを威しられ楚王恐れて
和議をとりくに秦の女を迎へて夫人とす
ありもなき故
いろいろたくらみしれども正しく父と

歃き殺せり秦乃女を取る事多
ありにいしも甲斐なくて免ゆる
二十四年秦魏冉を射て穰侯と
二十五年秦乃魏冉魏を伐魏河東四百
里乃地を秦へ贈る韓と武遂二百里
地と贈る
二十六年秦乃白起魏を伐て城六十と攻落
二十七年秦昭襄王みづから西帝と称し

使を齊より屈り高東帝とあり申候て
ありられハ齊王蘇代ら異見より従ひ帝を
稱そる事二日ありて止ちられハ秦と
屈りてゆめら申祭けま
二十九年秦魏を伐魏安邑と献して和睦に
秦畫く魏人を追出して已ら国人と入ら
もる家乃国ハ拙頃まて角元くより續き
さらしら附康王偃といふ名ら称る者

出来る折しを崔乃驕ものいふ名と産する
事あり是天下より覇名ある者左右ありと
石さらり康王より高ら兵起して勝と
滅し齊楚なんを伐く数百里乃地球
切取しハ汚きハ社て驕慢れ切ありよ
天より射地より敵ら社稷を焼亡し
長夜乃飲として庭中れ人より美酒を
呼せ門外ら国井に満るまて進とか

萬歳を呼継せきるれんと思義の振
舞乃ミ考うしハ其不行桀王よ似う
ゆゑ天下是を桀紂といひ奇まる
此年齊ハ桀惟暴しハ國人散こよ逃うせ
康王を温と心ハ不如ものを死して宗亡奇り
微子啓ハ三十二代八百
三十一年よりこの亡
三十一年初燕乃昭王國ハうて死を吊ひ
病とハ百姓と甘苦共同し天下の賢者と

得て齊乃遺恨をハらけんとたのひられハ
其臣下郭隗中ハ奇ハ者ハ是ハ馬を
千金よ買ハん也考ハ馬死しもうし
ハ其骨を百金よ買うける人ハ事
死しもる馬をハ買ハ奇ハ乃
あるかをして一年を立ハ新よる是ハ馬
三疋まて引こ奇ハ事を中義俗のハ
今太王賞者拔集ハんとおひのうて先

其ゝ來始のゝ代ゝんよおいて八其よ惰ゝん
ゝの歳人を出來ひ初ゝんとゝひゝれハ
昭王ゝ歳ゝりゝあゝんゝて郭隗ゝ舘を
作り改め師とゝあゝ国ゝゝ人ゝを招ゝ天下れ
士民と国我ゝゝ燕ゝ集ゝ集ゝ来ゝ
中ゝも樂毅といゝ名將ゝ国政とゝゝ
日夜国中ゝ拙安んゝゝ二十四年ゝを
招ゝ八国富兵強ゝ為ゝて齊の遠間とて

河ひゝゝ齊乃潛王ハかゝゝゝゝ決策を
滅ゝてゝゝゝ慢ゝ心起ゝ楚ゝ推ゝ三晉と
犯ゝ又東西周ゝ傾ゝゝゝゝゝゝゝ
振舞ゝゝ諫ゝひゝ忠臣孤咽陳舉ゝんゝゝ
賢人と殺ゝゝゝゝ国ゝえけれハ昭王ゝゝハ
時節ゝ來ゝゝ日頃乃本望遂んゝて七年
韓魏趙秦四ゝ国と結ゝひ樂毅ゝ大將
ゝゝて齊ゝ推ゝ濟西ゝゝ一戦ゝ伐勝

續て隙を窺ひ攻入て國乃寶を捕
て燕へ持運ひしかハ昭王ハ樂毅を
昌國君に封して對しける湣王ハ臨菑を棄て
莒乃城へ逃籠りしかハ楚へ援加勢をして
兵を起しる大將淖齒といふ者案乃外乃
燕と一味して齊乃地を押領せんとて湣王を
捕へ筋を抜く廟の梁へ掛て殺しまつり
樂毅吏を臨菑へ留り軍令を正しく
濫妨を制し賦稅をゆるくし賢人を禮
せしかハ國人乃勢ひ大に盛なり
齊乃七十餘城を下しまつる
三十二年初湣王乃迫胥王孫賈といふ者
淖齒乃乱を王乃至所を失ひてをめくせ
家へ帰りまつる其母へ諫らまつる市乃
かたへゆき淖齒を王と失ひ奉りせられ
誅せんと思ふ者あらハ右乃袖を引れハ

那波の旨俗人池集為て淳薗城攻
殺し滑王乃る法章は姓名をかくして
太史敫といふ者の家に奴となりて居りを
尋出し立て王として帰襄王 莒城に楯籠
三十四年楚国より推挙んと国えて六殺王東
国乃武公と為りて楚の令尹昭子に遊説
ふ給られ楚乃軍を率ひ伐ける
三十五年秦の白起趙乃代光狼城を攻取

司馬錯楚乃黔中を奪る楚又漢北上庸を
秦に献ず
三十六年秦乃白起楚の鄢鄾西陵を討取
是より先趙王和氏の璧を得て名るき寶を
得たりしを秦王十五城に換ん陽を割て
いひたりし故あり[illegible]ひんとすれば秦乃
強きを恐れ又無んをされば欺るんるを
恐れいりもんとある事に藺相如と云ふ

膳畧申しき士ありて秦使と面を
向てうし城とらまけんの度壁とぬりう
うてかりんかうく壁とけけくかりあり
けるの秦王より壁ゆ献うしらや城とまんと
しよ氣色しんてうしく相如つを進を出
壁よかく庇乃見ゆ賜り之教中けん
やうの壁と取うしけるいかかる
重寶と為うせんよ無礼儀式と改め

ぬ結取あるへきよ極うを安ぬうらひて
ゆ猶きれ壁と渡しゆて車叶ひれ申
見渡よ奪んとをうるて来う頭壁ゆて
回しく此殿乃楹ゆて打碎けんとを
やうく髮逆立て冠とつきあり楹ゆ
ゆんの立てゆる様けうとうりく
うてゆりける秦王押て奪んとを思う
なんとや思しきんけうハ日と改て禮儀と

穏うけそんして共日を先旅宿へ
向まる藺相如はらく事は幷と考るに
城へれ申しそんとうをれは動てた
従者は璧とりせ申趙へ返し和氏は
秦へ止りて罪と侍しは秦王も為方なく
ようきにりてれしく返しけり二十年乃至廿年又
秦王より趙王へ渑池といふ所へ会
せんやいひらまれは義とゆうたへ憶し

ありとゆいうんとて藺相如へ伴させて
渑池へ出會ある去程る酒宴半へ
秦王和琴して趙王へ琴を云りせ申れは
藺相如又秦王へ和琴しく為を申り
城十六ヶ所を以く秦王乃壽せてしひ
藺相如又秦乃咸陽城を以く趙王へ
壽せよといひ申るれんやと発る氣色也
なりもし穴はしの秦王へ伐さて事も

なし海内なる和なる事を行ふ會と絶てそ
ゆりける今度の恩賞として藺相如を
上卿として廉頗を上座とする廉頗
是を金と思ひ出合ならハ恥かしく
思ひ廉頗に対ハ藺相如
虚病を構へて出會せず或時遠頗を
廉頗と見うけ有りしを車を横へ座り
そこ〳〵にて逃しうもる藺相如の家人かゝる

振棄面目なくそ聞をる者あり是ハ
藺相如いふ為ハ
其その人なる為めて是を叱しなりしを
相を廉頗とおそれ給しと思ふ人ハ法らく
事に秦乃軍を趙へ加へ給ハ
我為人ハ為ハ今両虎戰ふんよ共に
命乃生る事なしとも思ふ人ハ私乃
意趣と思ふく君ハ大事と思ふ事の

肩さたかく振舞ありきたれは
廉頗是を聞て藺相如か門よりゆきて色々
道悔るをれハ別頸乃交をなして首きり
あ雪をを互に恨と思ふまとしふ程の交を
もて為ものを去程に樂毅齊乃七十
餘城を攻落しきれと莒即墨ハ両城ハ
攻ゆゑ攻ゆゑ攻ハ落ずして遠攻よりとり
きりをもて元を苦めをもりしらハ成人

昭王ハ樂毅七十餘城を吸の間攻取る
智謀を以て三年まて毋城を落しを去る
心底ハ知れ知て讒言ハ多りなれハ
昭王大に驚ると石集め酒盛しを彼の
讒言ハ云ハ出者と引出して首を別ハ
相國と為して樂毅と齊王とをとりける
樂毅ハ忠入二心なき統紀と書て
為りなれ齊國を初め諸侯乃國しをの

信義を感服して誰傾んせるる者を
なりけるよ郎墨は大将よ田單とい
智略あり国中き者あり然年昭王薨して
子惠王位を継く樂毅と不仲なるを聞て人
田單用者を法ひきなるは樂毅齊よ王
あらんを恐れ人乃いまつらるを
郎墨乃歳ひらく事を時を待て
て他の大将代りあらんを

郎墨乃日よ攻落まんを忘れと
いひ惠王誠ひ死のひ騎劫とい
者殺あり樂毅よかたり出れ田單
火牛をいい武器と云く火牛と八牛よ五色乃龍紋
畫ある絹を長七角に刀を
結つ尾よ葦把とはあ油とをき火よ火とつけて夜り
放れ敵の陣よ放ちか牛ハ尾よ火乃付たるき
怒り一文字よ敵乃陣小ケ入て尾小よ負死人数百人出来て
驚く而へ引續て切先を揃へ功て掛り騎劫り田單り初て
ひつきある武器なり 此一戦よ打破り騎劫と討取七十
餘城と取て襄王と迎へられ襄王田單と

安平君と号し国政をまつりごとする太史敖を
女と結ばしめ昌君王后として名をさだめ
去疾を楽毅に代へ文信を蒙驁に立退しる往時て
後趙王燕を伐る武徒合わせし八楽毅
滑とともに流し集首服王はたくしす
今日大王よ法ゆ中せしめたれ若又此
万一衆驚りて他国よ走りぬれも王乃
法ゆ孫とゆるるせよ孫中屈やとなられ八

趙王を感心して面を角りけ実小わり
かゆ紀名ゆ子国しゆ紀ゆ不順死ゆ
望諸君を号しもれ八燕ゆと共ゆ楽間よ
逃亡せしく昌国君として走りもれ此年
齊乃孟嘗君死しゆ諸ゆ家智と角して
家絶しり
三十七年秦の白起楚を伐ゆ郢を攻落し
東陵と焼伐よ為ゆ襄王ゆ八頃襄王ゆ弟

陳(ちん)より都をうつしける國都を攻られ出る
乃ち次代に墓所(ぶしょ)乃あり付る東陵と
まて燒立らるもの事を深き恥辱(ちじく)を劍し
角(かく)
四十年秦魏と伐角太梁伐圍 韓の加勢
と伐破り首四萬と討取
四十一年秦又魏を討て首四万と討取
四十二年趙魏韓と伐角れ秦是伐

加勢して両國乃勢と打破り十五萬人
を討取
四十三年秦白起を大將ゐて韓魏を牒し
合せ楚伐せけ事楚乃黃歇(こうけつ)使去らして
秦乃あり事ゐ其より國角上書して
楚と親(むつ)し事角乃韓魏齊趙ハ自然(しぜん)
よ小入り事ていしされハ秦王乃ハ其首
とらゐ角して服乃事楚ようし

和議をとりひ楚太子を黄歇つ事て人質
ゝして秦へ行てゐるにもるゝ
四十五年秦乃兵趙の閼與と圍角しゝハ
趙奢といふ名将を後詰としてさしむけらる
趙奢邯戦弦出陣しゝ僅二里ほりにして
陣をとゝ軍乃異見いたゝのハ死罪
なるとゝ觸りけゝ秦の軍ハ武安西り
陣をかゝく鐘太鼓乃音武安乃人家ゝ聞音
わゝり今や落んとゝさりける或人
いゝ紀ゝ武安と救出へといひしゝハゝ病気と
切ゝ拒諫りかへして居りまゝかゝ
二十八日ゝ秦乃間者趙乃陣ゝ来りと
物なゝ食せゝりて行くゝ
秦ゝ大勝をゝ間おゝまゝりと悦ひけ
趙奢ハ間者をかへとゝ引ゝ
打立ゝ一日一夜ゝ

陣取あり兵八萬騎を支給されをく
秦乃惣勢をつくしてかゝる趙の軍士
許歴といふ者あり北なる山城取切あり八
軍八猛しといひ趙者多し兵
一萬指向けるかくをゝるゝ秦の方も
我取切んとかゝる事なりて爭ひ
ゝんとする所紙を間と一度よ切かゝりしハ
秦乃軍敗しにけりなされ圍與の圍ハ解う

ける恩賞として趙者と馬服君とを対しまし
初魏乃范雎といふ者中変須賈よ対て
齊にゆきあり齊乃襄王その群臣
賞賜しあ金をつかはしハ須賈固辞
事を辞しあるめやと思ひ内ゆて魏の相
魏齊よきゝ中きれハ魏齊怒りて助と
押打歯をおかゝ質巻よしあ厠乃中に
亟賓客かゝ溺ありをゝ范雎死する

真似して免を出すものを鄭安平といふ者
かくまひ匿名を張祿と改るを折しを秦の
王臂といふもの魏小使よ来り連うて
見と秦王よ進めけ数初て見参乃時范雎
そらみてして永巷乃内よ入れい宦者
怒りて妃嬪い泄なるべき所なあり次
もや王れ出かるもの進ぜられい范雎
乃内よ出太后穰侯乃
向りせうてきけるの小王と中そりやいひ争ひ
きの変ハ王を怒く出来りてをあり国をと
同たりけ事ハ面ハ右れ人を捕ひく上ハ太后
乃内事ハ事下大臣小いるまて悉而新く
中せきうんとあり国れハ范雎おのふやう立ッ
もの猶と多ることしもと国内のるいを
海先他国乃るものとく王れ心ばらんをもて
なりひ遠く交りう進く攻るとく齊と交りを

結ひて韓魏を攻め襄侯魏冉ら韓魏と
越て齊を攻るを敬て井ひそゆるひ
きれ秦王の心を惑ひ客卿として軍法乃
相伝し魏を伐て懷といふ所を攻取る四十七年
是初て范雎の策を用ひ為て関を
秦乃ち蜀を取るを高戰ら魏と敗きて
河西地を取る是一ツ司馬錯ら謀て
蜀乃富饒となるなれ二ツ范雎ら

遠く使り迂く攻るといふ術を用ひ
為る是三ツ地を策して天下に敵なら
ずしてなるなり
又案るに人は稟て才智たく備き
ものハ多くハ其氣ひんよを志大ふして
必其才をあらハしその志を遂んと望ム
人る忘るものの人とそれ明なくして
讒謗才能忌ものの詞よつきかるもの

身を進ぜんと道徳を紀し世界を
始るまゝに道を絶くなきと思へる
時ハえて蜂蜜衣食し庸人のたに
屈て鼻うちたれくらを向ぜき必
已ら智力を試富貴をいとなく求ん
こゝ或ハ他国よりゆき権勢をうしく
本国乃宝とあるを高鼎花雎ら類是也
或ハ盗賊奸人の魁となりて国の亂を

引出し懲布鄙誠ら類是なり（文人ハ宮漢の言祖の臣
なり初盗賊記きり）世数人の者已ら国より身を進
ぜき道ハ只一筋あり海ら八皆富国と
戡亂乃功をあらハしてハ何条忠親に
そむき刑憲を犯してかるゆゑハ板垂
へき是を以て先王乃代より賓興道藝
選挙及第あんとふ法ありてかり
ゆゑ人より賜まてゆ者ハ才よりあらゆて

公侯乃旨き位中と身我進む屋き
道我一筋あをとれ天下に異才
俊秀なる者として精力乃あん活り
と道義し盡さしめ忠信仁義の人と
なし〻国に月れ出て脱よかるまもを
拔取〻ら八下に殘り生ほりの八庸陋
愚者乃人のなるへし抑行るもとり
なし出し游くき行き八選舉及業れ

法と以て治の助と成るのみ以て
亂乃源とふさ〻れ術とする
四十九年范雎ら秦王をよへ〻ら〻と思ひ
太后及魏冉ら惡るもと一て中書りしらは
秦王是我き〻真母を后をハ推おろし魏冉
芈戎公子市公子悝等を逐ひて范雎を
以て亞相とせ為り侯に封ず
五十年秦趙と戦て城三ツ我封ず趙藺相

加勢と清られハ長安君といふ連枝と人質に
遣ハしたるハ加勢せんとひきれをもちての愛
ゆゑ〳〵中こ所ゑ所ゑありしと左師觸龍
ゆゑ〳〵者諫ゑ申ゆゑハ齊ゑ加勢して
秦の軍ハ退こけ申ゆゑ四年齊の襄王卒去
あ申子王建國を嗣ゆかなゑもしハ申政ハ
皆其母君王后乃ちゑひあり
五十一年秦の白起韓を伐て城九ツ首級
五萬と討取ゑあり
五十二年秦ハ白起又韓を伐て南陽をとり
大行乃通路と取切ゑ楚頃襄王病氣
ゑゑると聞ゑハ黄歇范雎よひ者ゑハ
楚王の病快氣ゑ〳〵ゑ今来
ゑゑとゑ〳〵ゑ長く位味方ゑ左
なゑして楚更ゑ兵を立くハすを秦ゑ清る
心ゑ申ゑ〳〵ハ秦王ハゑハ先楚王乃

廟堂とんく為きとして黄歇よ服陽しハ
黄歇ハ初てに左ゆうしてその身ハ秦よ止り
専羅と侍秦王ハのやよ怒り黄歇を殺さん
ぜせ〜と范雎申ありて殺されかくりけま
屈りて楚王歳〜太子圓と縄を考烈王と
〜黄歇よ和領ハ春申君と号し相として
ぎ〜りきる
ハ十二年秦ハ白起韓と伐く野王と攻り

上黨ハ事韓の國都新鄭〜乃西路絶り
しハ上黨ハ東ハ趙馮亭と〜ハの長民ぜ
従合して上黨乃城邑十七ケ所趙のゆへ
せんとひ為りきれハ趙乃平陽君故ゆして
利と得んるハ兵乃端よゆ〜韓上黨と秦へ
献りて趙よ与んとふるハ災難と嫁ぜん
とその事ぜ〜かくハ従わんす
ぎ〜為りぜ〜ひきれとを平原君若〜

から海をへだてゝ古地を侵さゝり
六十五年秦の昭王薨を大将あゝて
上黨を攻れり上黨の人民皆趙に
来る趙廉頗を大将として長平に陣をとゝ
秦の軍とゝひとゝもに防ぎ久しく
うち頽出をせざる間趙王は氣色以乃外
なるを聞て秦乃范雎間者を遣
馬服君趙奢の子趙括を大将あらんとて

れば廉頗は相如と為て
陰人をなす事なりんといをせられば趙王聞て
ものひ趙括を廉頗に代らせんとて藺相如諫る
屋うちをせ中年ひ又趙括をもき時その父
趙奢と兵法の問答をしよ趙奢一句と
難しなりしうちを終るよりいをうり
其如いうを聞れば軍の一所懸命に場なる
そ殺るを趙括に安くひなを仕ぬる

り始め渠より大将をせもうんより及一定若
乃以大事を謀らんとそそいひきうき
今度大将蒙り申されいそ冊おらくのず
中にも止め申されを趙王きらはるもしうは
乃ちいと度渠うとし軍仕損しもうそ我く
まれそへの罷沛免あるをふやとまそ中せ
しうとを趙王耳申を入うけ事秦王趙指ら
かそうもるやきくそうに白起となり事

王翦よかうらせ始め敵よりしもうんとのは
死罷なるそと謂しうける古須より趙指廉頗
小代り軍令後改め軍更とうらへ秦乃
軍に打て掛る白起そうに申して逃申う
しに趙指勝より乃つうも秦の壁まそ追つめ
ゆまそ秦の軍城そ攻うふそ申いくく
拒き横合より秦兵極の多と反きしは趙指
かるいしうや思ひきん反出と築く楯竜

加勢せんとて待うけ奉る秦王かくと聞し
ふうう河内よりゆきて十五万士卒は
皆かうさ長平へこもりけるの軍は海内
精を厳しく取きせられ諸の軍断食
ゆきて四十六日人乃肉を食ひあるいう
めとして一方を破て出んとせられ支を
叶ひて今ハせんとする諸指ゆうゆうかく
おりる秦の軍と射殺しられハ

四十萬乃軍勢皆奉る降参を白起諸の
兵をうつの者ハ孔となられしゆうり
かくしてたちまちて皆院より追入て殺しける
その後茅海に討取る首数を捕四十五萬
都合八十五萬人をきこえ奉る希なる
敗軍なりけるハ諸乃人と所の毛をかく
おのきまゝ

天下の地獄と人の所ハ海をハ土蔵ハ

脊骨中折り脊骨折れんとすれ
ども人民たゝて体内働へき所を
上意既に秦小とられぬるとハ韓の折て
秦に入るるものハ及ぶ所のかぎり
をもつて家財ものこらず悉一戦して
天下の事いまや定まりぬといふべし
六十六年白起軍勢を三手に分王齕司馬梗
張大将ゆきて趙乃武安皮牢なんとを攻落し
大原をまた上意のゆゑを元をもつてれハ韓魏
恐まつて藺代を奉りて花雖よいをせけるハ
趙乃ゆゑなれ秦王ハ天下王たりのうん
白起ニ公ゆゑ乃ちんはらん君をあまゝ下
座に居中国小国ものゆゑ今韓趙と和渡して
兵をとゝのへて白起ゆゑ酒ハ出来ぬまゝと
いひ出れハ花雖賄賂をとゝ思ひうん秦王小ゆて
韓趙と和渡し白起ゆゑ軍をひきせり是ゆゑ

白起を以て秦を亡ぼすべしと云ふ初范雎が
秦乃権威をとり須賈秦に使ス来りしを
范雎敬ゝ小祇辱ありて魏王
小ゝとりて魏齊が首切て呉れさるんハ
大梁の奴原畫くに切さいなんとすると
云れハ魏齊ハ趙ゟ出奔して平原君が家
ゟ隠きける此年秦乃昭王平原君をすゝし
まして是をとめしゟ先魏齊が首討ゝ出さ
ハ

平原君とゝ中間ゝ趙ゟ出よういひゝ
きれハ魏齊又魏ゟ信陵君を頼んゝ
たゝしゝ信陵君對面をとゝいるゝありひきる
しきゝ怨ゝ怨ゝ自害ゝゝ趙ゟの首
ゟ秦ゟ與へハ平原君ハかゝれゝ范雎
其恩を信ゝ王稽鄭安平ゟ官途の
ゝゝ中海ゝ又家財散して恩ある人ハ
一飯乃恵をも必報ひ睚眦乃怨をも屈

あまねくみな合戦の遺恨をも返報せん
とぞいはれし
五十七年初范雎か申ゆゑて白起に軍を
とらせしか白起病気と称して引籠られけれは
此年王陵に大将させ趙の邯鄲を囲まれしを
軍はたゝかひかねしかハ續て王齕を以て向ひ
邯鄲を責めしかハけんこし頻に平原君こゝろよく
楚にゆきて楚王に對面して加勢を頼まれけれは

春申君大将にて打て向ふ魏よりも晋鄙
に十萬の兵つけて國界まて出陣せしかと
秦を恐れてありけるとぞ平原君の夫人
ハ魏の信陵君は姉なりしかハ頻に使者を
もつて催促ある信陵君色々と魏王に申
進めしかとも猶豫なされハせんかたなく
侯嬴といふ者の謀をうけて魏王の愛妾
如姫に頼みて軍の割符を盗み出させ晋鄙か

陣所よりゆきむかひ魏王は伊闕に晉鄙を
救はんとて軍勢を集め郫郭小丹に向ふ昭
秦うまいらつく攻めとられ数代の国都
なれい郭を脱ようもなれと急ようへしも
入さりけり白起郭の軍ハ何となく
きるやあんとてあさまつ中由関えられハ
昭王怒りて白起よ向へを何うれ
とと病をうあるとて出さるハ官位と

剥ぎ取り杜郵といふ處にて自害をして
ひとせうもなくとるに楚魏の加勢も
着陣し信陵君麾下て秦の軍を郫郭乃
下めて大よ切破しるハ王齕ハ引て邯郭
乃圍を解られハ信陵君軍勢をは魏よ
その勢ハ趙よ出りけり
五十九年秦韓乃陽城負黍を攻落し首
数四萬を討取又趙を伐く二十余縣を攻落

首数九篇と討ぬれける殷王忍れて諸侯を
合縱して秦伐討せんとの事結構をしかは
秦より李将軍樛を大将として伐て向ふ殷王
なしかたきをもつて降人をもつて秦ふ
ゆきし共侍領三十六邑人民二萬強次秦に
動り乎乃誤と俺のひられ秦乃昭襄王
土地人民と請て殷王をいゆるしてかへし
給せるる秦年遂て五年しの武王より

三十五代八百六十七年にして周の天下ハ亡ぬ
平王東遷ましまし秦王威日に衰く
戰國の時なりて又二ツ三ツよれ長
土地人民大國乃為更れ領も及ち
乃ちとて下猶あるまくをりて王位
を失ひ給ふるもふ根本国して源ふり
くりけるゆへなりて諸侯乃根本
文武成康乃御代よりもて禮儀伐

あらハるゝ仁德と施しそなる
深して民の耳目より見られ肉なれ骨
髓よりみとるゝ事ハ其ハ子孫衰へ
ぬ事なるをあかとり給ふせんとすれハ
先王ハ立たる礼儀ハいつくを忘れ
かしこみ又猶き給ふせんとすれハ
先王乃施しるひし仁德の余さ
をれ事を廢ら民是長久よ保き

ぬ事しゆゑんとそ中ゆう 司馬温公乃論
天下と治るハ仁と禮との二つよ過る
道ハあらし大學に爲二人君一止二於仁一也
い論語よ治二國以禮一也孔子乃ゝ
きゝ所うて記たなれ
去年よ去年乙巳乃年まてハ六年ハ軍奬
なれ流るゝれて流石叛王ハ王位よまし
きれハ猶と文武乃政乃侍名殊ゆと思ひた

史記に曰く秦始皇帝二十六年丙午乃春
ゆ世に八一天四海を天子となす
世乃中世なり秦 昭襄王五十二年 楚 考烈王八年 燕 孝王
三年 齊 王建十年 韓 桓惠王十八年 魏 安釐王二十二年 趙 孝成王十一年 乃
七頭既とあらへあるとふんしられと韓魏ハ
既に秦に屬國乃中に討ゆられその体の
四ヶ國をを秦の軍とわしらひうく詮
不世ををかうをを後ふんくありけるはあ

考王乃弟桓公河南に封せられ子孫
西周といひて廿頃まく續きたりし王室
既にあらふなる上に其人民今ハかるを
もおのひあん東國さて逃散まれハ其
寶器をは皆秦ちまを大集反其君文公城
隱狐裏を以て有る遷しまくうせ西周し亡
を張りに迫をもうり此年范雎ゆ死い
かをを王嚮鄭安平を遣に羅驁うく

范雎の權威をうけ為政を失ひ燕の
蔡澤といふ者来りて范雎にかわりて秦に
引せまいらせ代りに秦は亞相となりぬ
丁未乃年韓の桓惠王は秦へ入朝し魏乃
安釐王は國乃政道皆秦へ仰ぎ知とそ請ふ
事なり
戊申乃年秦初めて郊の祭をす　都の外三十里へ壇をつき
天地祭る事なり
是天子の儀なり也

庚戌乃年秦の昭襄王薨しまして孝文王
立　韓乃桓惠王衰絰にて喪服着ふ
弔にゆきたりき是諸侯乃天子へ
ゆきたる禮節にて國にて　燕王喜　孝王
栗腹と謀りて念願といひ申しに
栗腹申して諸乃兵強長平ゆく
討死して強る者もんみなをもて諸と
戊辛申へ進めれはいたて栗腹乃

大將こせの發向せ將渠樂間なんと謀り
もれをきくもしくして王うう後陣より續くん
とく限備と章ひて出馬ある將渠王乃後
乃常卿の級せよとうて引留れハ王是ゆて是と
跳ありけ事將渠ハ爲城ひ事ハ
してとく漕と流しられと年あとし是
ず立しう果しゆ廉頗より切立られ散くに
ありて國都より逃翼り潛く將渠より扱せて

翁乃兵を出ろうを紀けり
章交乃章秦ハ孝文王位より即く僅に百
ゆして章しうう楚立是と莊襄王ふ
莊襄王ハ孝文王の仲のゆめて昭襄王乃時
公子異人をひひ人質をゆて趙より居りしを
陽翟乃大商人呂不韋ふ者是とんて
是奇貨可居ものひ奇貨ふゆうしきものゆ可居ふかし是て
異人より居二十餘人乃出兄弟の

中にさまざま父母を愛せられ給へども
ひろく世界父母なきの人多し必
其時世間と絶えふへしとなんこの頃
華陽夫人は父母の情覺ゆる由なる
ひろく世間を絶たんの人とあるを
世頼あるべきれ某涯分ならんこんりん
さく絶えいろの孫策と賞調へ奉り
ひて華陽夫人は姉よりあり是と夫人か

たまう
賜り異人の奉心深くさまと夫人と絶慕し
あらぬすを抜為しひろ姉していをせる
屋うい夫人さまの厚さ親に鬱りをと
いへをいまを世子是をひつよ早く公達の
間ゆく奉心なる絶えひ世間より定め
られ世界は未をかくらひのくるし世の勾ひ
いつまてうみめるられかうひろ色く寵愛
乃哀ゆんこ絶いるは思ひるとと一言ひ世

ものふのひとりなりや公子異人は服腹
乃出るなれは法世嗣をなすなるはなし
ものふ今夫人れはそらひゆく成
あもそれさいらせかて異人は國かして
國政將夫人は子なしてるとのうを行末
のものふ榮えあるとのひきれい夫人
いうあをそく折を伺ひ立ちよりまを出ることを
願て願望あり呂不韋とよこて傳かて

仕きれるかくこの呂不韋邯鄲より帝の
美人孕石亀長腹より也とのまを或時
異人より見也不韋こせて見を異人の伴小
道りけるを繰る男子故とのうけのう腹より
始皇帝をいひ人なり實は呂不韋の
種なりられて誰知人となりとけまをを
王陵王齕邯鄲と圍し附呂不韋者の者に
賜そうせて免き出秦乃軍より帝入國小

うう夫人よりみそなはす夫人うるはしき君
とを楚と改めて世嗣をもうけしめよとハ
継母なりけるを面うて華陽夫人ハ華陽君
をあり免共實母夏姫と夏を后として崇る
壬子乃年秦ハ莊襄王呂不韋と相国と
文信侯よ対しもう東周の君諸侯と講り
ものを秦伐んとの出結構あるしハ莊襄王
呂不韋とはうて呂と出して君と陽人
襄よ遷し給ふ給ハれハ后稷文武の出祭ハ
絶ふ祀をとの絶ふりけるを憐しいを申て
恩なり秦うを韓乃滎陽成皐を討取
三川郡を置
癸丑の年秦趙と伐て三十七城と攻元
甲寅乃年秦晝く上黨乃諸城と攻落し
太原郡と置秦ハ蒙驁魏と伐て魏乃軍
屢破をとれハ魏王呂と憂て信陵君と招

しかと信陵君魏王の氣色を悔りかへ
うるゝこゝろしかゝ孟嘗公薛公といふ二人の
先人いふ所うハ君乃補侯よ重せられ
魏をうゝ地方國あまたゝて今時本國
事急なるに忘心もなき所の若秦の軍
大梁城と攻囲し先王の宗廟と危墮ゆ
面ハ君何の面目あつて天下の人と見
かんとゝひられいひを畢ぬよ信陵君顔
色かゝり即日に打立て魏よ帰られハ魏王
よりもとむと将軍とゝなりけ侯信陵
君魏よ帰りゆゝ我とゝ加勢を
出しられハ信陵君立箇の勢を下知して
蒙驁と河外あて討ゆゝ函谷関もと
迫詰られハ秦乃兵頭とゝ出り信陵君
ゝ武威天下にゝて振ひもゝ秦是とうまひて
黄金萬斤と出して間者と入晋鄙ゝ客を

よりて魏王より讒言させしかば魏王見にまして
人をして信陵君より代らせる信陵君世ハちや
見まそとおりひ不労を称しゝ出仕と為め
日夜酒色より耽りんのまに楽を尽し始皇年
にして幸しあり為月秦乃荘襄王薨去する
政立見と始皇帝をいう年僅より十三なり
呂不韋と仲父と號し国乃政道を任せる
襄公初ゝ周の平王乃時国賜りしより三十

二代五百七十年續きあり嬴氏乃種は
荘襄王ゆえ絶ゝ
孝文荘襄二君ゝに世とゝ為せる
見呂不韋ゝ不為めやと胡致堂ゝ論せし
ゝかるに孝文呂不韋あれハいゝ知る
秘術ゝ知ゝ世ゝ知人と
なるゝと云ゝ仕事の様や
渠ゝ心ゝ伏ゝ
ゝ疑ゝ

あらためて見るべきの寶を胡致堂ハ正しき紀
眼と申す　胡致堂ハ歴史に背かるる人にて讀史管見と云歴史を論じたる書を著す
又案するに秦の獻公石門の戰より秦
昭襄王周を亡せしまでに五百一百
十一年の間秦乃諸侯の年を数せず
斬首流血合せて一百九十八萬八千人
とあり実に例なき暴威と恐るべ
しと天下を切ちくれい已ゝ兵力
雄敵しきりのをあしし嬴氏の基業
萬世かくるべかりしと思ふべきなれと
天道好還の理あること福善禍淫乃道
理なれば叛のあるべかりしなるも
呂不韋を以て大蒙を生じ周滅亡して
僅十年を立たるに國ハ亡び化姓乃
あとなけるとそなりもされまい
人世数をなく滅をなるもの

る孫の業へさきあめしやハあ
乙卯乃年（今年秦始皇帝元年也）韓乃桓惠王秦を
はらうして軍と関東よ出させ間しとく
鄭国ないふ者と間者よ為りて涇水と堀
ぬいて河水よ流しいるゆとゆ進め
事れ本よ秦謀為して鄭国ハ首とそね
らくこたゆ極しう鄭国いるゆ業ハ韓の
為よ為うし謀ゆれとるゆ成就ちうん

よ仮秦乃国萬世れ為ゆるくしていし
者まハちうハなし器せて国中のまと
水と切落して新田乃潅田よ流しうハ
四萬頃れ上田出来く秦をまもく富
ゆうゆめて為うまゆ
丙辰乃年（始皇二年）嫪の廉頗魏乃蟄陽と
攻落しまるう春成王薨して悼襄王立楽
楽として廉頗よ代らせられハ廉頗魏よ

出奔ちて共に趙の軍度々敗軍ちて
しかも悼襄王廉頗の事を思ひ出して見て
ありて使を廉頗のもとへ廉頗よ表裏ある
郭開といふものの使者に金をとらせて
らせける廉頗使者に對面して一斗の飯
十斤の肉をもりて鎧引の馬よりて
一廉用めしを立食いきほひとんせちう
げ事使者帰りていふ廉頗年寄申候

いつかをゆしを物ひとりにて繪の用ふ
之度ゆて溺してゆちひろれる悼襄王をと
かへりを通さうきき
丁巳乃年始皇三年秦ら李轉を伐く十二城と
攻高を城時趙ら李牧といふ名將ありて匈奴
乃防ぎて代雁門をいふ所に居りしら
四ち年をもちして士卒をとりて騎射乃
稽古ちて匈奴の切入防ぎよ陣屋をかまへて

おそれもなれハ匈奴憶したりとおもひあなどり
大軍を起し切入ハ李牧を防きたるに
軍勢をなくし已一戦に匈奴ハ十餘萬を
討取東胡林胡をなんとを攻破れハ單テ
匈奴の王乃ち十餘年の間新秦国に近つき
滅ぼすべき
己未の年始皇五年秦魏と戦ふ二十城を攻落
東郡と為す

庚申の年始皇六年諸侯秦乃龍ひ来る中心
時匈奴ハ攻うきへく楚趙魏韓衛合縱して
楚王共頭取し春申君を大将として秦と戦て
壽陵と討死函谷関まで推寄せし秦乃軍
切に出られハ五ケ国の軍皆敗軍して
うへく楚の朱英といふ人やう沿茅乃附ハ
秦楚の間に韓魏共周蒲なれハ社二十餘年
の間秦の楚城攻るゆハるうけき今韓魏ハ

朔夕に川に流れ入るまでの間
秦楚と合戦や初りしかとひそれハ楚王
恐れて壽春に都をとて遷しき
癸亥の年始皇九年初始皇帝即位年なりしハ
太母華陽太后呂不韋と密通志るり始皇
母を退て成長あり呂不韋孫きん
事を恐き己ヶ家人嫪毐いふものを宦者
なりと偽り宮刑せられて陰茎を切ることを
後宮ヶ出入さるを宦者をいふ されを

去年より弟ヶ世男子二人まで誕生ある嫪毐
権威を恐れ国乃政道皆渠ヶ計ひなりし
七年に去年孫子計明わらんと図えしハ
嫪毐毒なられて兵を起て反て昌平君昌文
君等ヶ命して打ヶ世を従類と為て
去年と雍中ヶ於る押籠共二人の子殺し
きり後蒙驁といふ人諫よ為て母ヶの
同ヶ入れてくになりたりき初楚の春申君共

君孝烈王のるすきとうまひおりひるなすく
生んつもりの女と多くまいらせうとせんなる
懐妊ハあるまけ書を貴よ諸乃国の李園とふ
りの妹春申君よりおりられて懐妊ならし
ハ李園妹よ数くく春申君よいてもせるハ
楚王いまさるる国ましまりて王の百歳の
後ハ位兄弟の内よりて国をのうんたら免
たらハ其方様の人をうて世よハりてらやける

色れ君いつまてつかる栄華を世ちのふ
へき今日ハ命なりハ覚ん難き所
人をいつも君のりハと王よ面ましせのうん
に天れ幸ありて男子ありけれハ是君れ
ちる国家のひなん楚乃国ハ盡く君乃
位心ましたれ春申君ハ
とく見とまるよりて
うみを太子とする李園ハ妹と名し李園

用と遊ばされて政道をとり執行しら
春申君うせ事をとりけんるものやあらん
是と殺して口を滅さつやとなりひかる所山年
考烈王薨しかしら李園武士を門の
内より伏せ置春申君を出仕せる所を
立ちまち刺殺し妹乃うみたる男子
世嗣ぐ是と幽王とぞ申しける
呂不韋黄歇の極悪大罪あげて論ぜる

まて是れ巧計秘術天下代人の
用を掩ひ隠すとおもへれど天の冥慮
知ぬ乃れ乃踵をめぐらして
首の根を切るとそんぬ元荘襄
考烈二君乃色よ母ひて父祖の血脉と
為ける小母や中絶ず文慮乱
為へきを論ずるまとれ
めぐらぬ河内夷狄匈奴の為ぬ

毒蛇を殺さゝるものなしとあつ
血脉とみるとらんとすれば
たゝ内きこの祖宗は統とつぐ後をうん
面んこゝろ少の迷ひ出きん女の
いつゝを重くこゝろ
四一時の無よめてかゝるものなんた
いかる禍の種ゝ加色さうもを
はしみゝふへきはるものあるあ

甲子乃年始皇十年秦は太后禽議して他國の
人ハたのゝ中國乃ものをたゝたりそん
はゝめ一切は旅人ハ皆ゝ出して退立よ
と義觸うけるに楚國乃人李斯といふ者
も退立ゝ上書していふ所うハ
穆公乃月ひめひし由余百里奚蹇叔
なんとハ皆他國の者なれ孝公は商鞅惠王
乃張儀昭王の范雎皆ゝ他國のものに

はいそうやいつまでと秦乃法為仕つてハ統き八
代迄ハ人の秦ハ影日向仕るものハ海
と苦悪乃擇と別く旅人ゑんとものは
一切ハ逐立のゑん事ハ敵ハ徳付るめてハゑん
見と寇ハ丹あをかし盥ハ粮と送るとや
中毒さ心えぬはたらひとさ丹あ一ゑ
ひられハ始皇ゑむとて逐客の令とをめて
李斯とその官ハなし統ハ共謀と見い

竊ハ諸侯乃国てに雑士をゆ或ハ金ゑ
ゑんと我送りゑさ待とかゝらひ又ハ乃民
ハ中とあしさ海ハひ毒てを存良将に
兵つきて引續く打事向ひきれハ数年の
間ハにあハ天下とそ治ゑ人ゑる
丙寅の年始皇十二年初秦ハ相国呂不韋罷あり
ゑ官とそめらき領地ハ閉居せしゆ甲子乃年
諸侯ゑきゑ其復任あゑんるものと中信使去り

きらせ給ひしかハ始皇帝何事とうけ出さん
けらんとて蜀よ流罪せられ給ハ呂不韋
恐れ給ひて自ら鴆毒と飲て死ぬ
給ひける
丁卯の年（始皇十三年）秦ら書翰を成てその大将
麃輙を討取られハ翰李牧よ大将ら也宣安
めて秦ハ軍を敗くハ小ハ破て却ぬ
己巳の年（始皇十五年）秦ら翰の復盃番吾を
落しまるる又李牧よ遣くらるる
辛未乃年（始皇十七年）是ら書先韓ハ亡に哀へく
連枚乃韓非と云者と使ら秦よ参ら
藩臣となんといひ入（丁卯の年）又南陽の地と
献して庚午の年秦よ媚られとかるつとして秦
四史勝を参らて韓王安を生捕て滅し
給ひ潁川郡とそなる景侯ら書十一代
一百七十四年にして滅ぬ

壬申（始皇十八年）秦乃王翦趙を伐趙まる

李牧よ大将ゝ防れい秦ゝ李趙王し辟

臣郭開よ賂とゝ世て李牧ゝ殺ゝ

せんつといを世れい趙王偽とおのひく宅

伐殺し事ゝ

いゝよ趙王遷ゝとゝゝと李牧ゝ

罪のわゝ功れありしを考ゝてや

者へを考ゝ殺とかくいひ世ゝるゝハ

讒言世ゝ

見ゝゝ殺ゝ巧なる物ゝ世

見ゝゝ殺ゝ魏乃文侯（文侯樂羊に中山を伐せしとき）

侍ゝ中せ一人多く文ゝゝゝて一箧に入ゝ

ゝれと樂羊を疑ゝて終よ中山を伐れゝゝ燕の昭王

無樂毅を疑ハ伐ゝ賢を賢明の主ゝて

ゝよ上よ見ゝゝる

癸酉（始皇十九年）王翦趙王を生捕趙と

滅て初悼襄王愛ゝ嬖ゝ嬉ゝ嘉を

立て王遷を立ゝ世ゝ（廿の年）殺ゝ王遷を生捕

ある上ハ趙を支嬪を嘉とする迄く代王ゆ
号し燕乃勢と一ゆるゐて上谷ゆ陣と
居ゆり楚乃幽王薨して弟都立一ら民
郝ら廣兄員芻を殺して国と推九ら
甲戌乃年始皇二十年初燕の太子丹人質とゐり
ゆ趙ゆあり し附始皇と親しゐ事後
又秦ゆ人質ゆり し始皇ゆ禮を振棄れ
ハ暇ゆえゐゐ逃ゐり己巳の年いりゆをして

遺恨をゐらんせゐあり し衛人荊軻といふ
刺客乃ゐゐしのをかゐひ使ゐゆ仕立て
督亢の地図献ゐんと披露して秦ゆ参ゐり
始皇對面あゐん附刺殺せゐて天下ゆ名刀
ゆ以ゐ匕首ゆ毒薬とぬゐ地図の奥ゆ巻
隠ゐて持せゐゐかゐゐ咸陽宮ゆいり
荊軻みゐゐ地図をひゐて始皇ゆ披見た
入ゐゐ乃奥ゆゐる匕首をゐゐり始皇ゆ

袂を無名と為て、一刀にて始皇を殺さんとせしに、其鞘
きつゝとりて乃其剣を抜んとせしに、其鞘
はなれず始皇にとられ柱をめぐりて逃のび
出る事あたはず人々下に仰て
上殿へと変と失ふ又秦の法に殿上へ
兵仗を帯する者と禁して其物持る者
あれども兵あれども合せ左右の人々
乃剣を背より負て抜のけと教られ剣に

抜られ荊軻を尾屋に切すゑられ此首を
もつて投つけられを柱に打つて置ける
絵に荊軻を切殺し八刺めて肆に出て祭
始皇大に腹をたて面々軍勢を催して
王翦らに向て燕乃都薊乃城を
攻つめる
乙亥の年始皇二十一年王翦又薊を攻しまれ
燕王喜遼東に落ゆきたる丹乃首切て献る

丙子の年（始皇二十二年）秦の王賁魏を伐て黄河より
水攻にして城を破る也さきかけしかハ魏王あらハて降
人となりて出ける所を見て教て魏を滅し
ける文侯ゟ孝ハ代二百十九年ゟ亡し也
初始皇楚国と攻亡さんいらるれ兵ゟ入
国をさせ大将李信ゟ問しゟハ二十萬ゟハ過
国とやらん又王翦ゟ問れハ六十萬ゟ多
らんとやらん惑しあるゟて李信蒙恬を指
小二十萬乃兵つをて発向て王翦ハ病気と
称して頻陽ゟ引こもりける所ゟ李信
勝軍して軍法西ゟ引九度を楚人三日之
夜息をとをさらて迫けて大ゟ是をうちやぶり
散々に成て逃帰られハ始皇大ゟ怒りて
ゟゟ頻陽ゟゆき王翦ゟ謝言し中ける
また六十萬乃兵つをてそ行もける
丁丑乃年（始皇二十三年）王翦楚ゟ攻入られハ楚国乃

軍兵國中をとらうを刻て出王翦ちうを
掛合て取出と築を搗篭日し十年に渡と
刻り世物を食せと遊いせ亜軍せんをと
せをりけを楚乃軍是を退屈して引をと
す敵而を追訶る伐をかう思ふ図をうち
腸て将軍項燕弑刻を傷を棄して逃く
とを為しをを
戊寅の年 始皇二十四年 王翦 終を楚弑滅して

楚王負芻とを捕て楚郡とを置しう
をを熊繹うを四十九代八百九十四年に
して亡ぶをう
己卯乃年 始皇二十五年 秦の王貴ぢいて遼東
を攻為し燕王喜とを捕うく燕を滅し
又代王嘉とを捕うを代を滅しけを燕ハ
召公奭より四十四代九百三十一年にして
亡弱ハ列侯うを代王より始るまて十一代

百八十二年ゝ〳〵ゟ亡ひゝ

右周威烈王二十三年ゟ始皇帝元年乙卯

秦始皇帝二十五年迄一百八十二年

乃間と戰國七雄ゟ世をいゝ統中

丙午の年ゟ始皇三十四年ゝ間一天

四海ゟ天子といふものゝ初世なり

時ゟ庚辰の年始皇齊をゝゝ

天下一統ゝて秦ゟ世となる

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan